

『續松葉集』について

村 田 秋 男

『續松葉集』は江戸初期に生きた京都の商人、内海（六字堂）宗恵の家集である。四卷四冊から成っており、巻第一から巻第三までには和歌、巻第四には和文七編が収めてあるので家集よりは歌文集と称する方が適當であろう。宗恵は家業に勤む傍ら五歳を費して、万治三年（一六六〇）には一万二千余首を有する膨大な『松葉名所和歌集』（以下の記述では『松葉集』と略称する）十六卷（目録一卷、本文十五卷）を編纂し、板行の功を終えている。その名所和歌集編纂の副次的所産とも言い得る『續松葉集』は、延宝二年（一六七四）に板行されている。

かつて、小高敏郎氏は久しく不詳であった宗恵像の陰翳を払拭したと言っても過言ではない劃期的な御高論^{註1}を呈された。殊に、「略伝」の中で纏述された宗恵の生没・家系・家族などに関するそれは、充分首肯し得るものである。『續松葉集』巻第三、巻第四に所収されている和歌や歌文の中には、小高氏の論拠として資するものが少なくない。

本稿では、『續松葉集』の諸伝本、内容の紹介と他文献に所収されている和歌の検討を通しての二、三の問題について述べてみたい。

『續松葉集』の諸伝本に閱して『國書總目録』に徵すれば、写本と版本とが伝存するとの記載があるが、写本による伝本の存在は認め得ず、版本のみが現存するようである。本書の成立年時から推するに、元來版下となった写本は存しなかったであろう。今、披見し得た延宝二年（一六七四）開板本四本の書誌を記しておく。

(一) 神宮文庫蔵本

書型 大本、四卷四冊。体裁、縹色表紙無模様。

縦二七・三糎、横一九・六糎。楮紙袋綴。全冊右下に「共四冊」の朱書あり。

題簽 表紙左肩双边に「續松葉集第一名所第二名所部」部、「續松葉集第三名所第四名所部」の印行題簽を貼る。

内題 「續松葉集第一（一四）」。

尾題 「續松葉集第一（一三）終 六字堂宗恵」。但し、第四にはなし。

匡郭 四周单边。卷第一・卷第二、縦二三・八糎、横一七・七糎。しかも、読合すべき景物等と名所及び証歌との間には、単野の匡郭を施して区別している。卷第三、縦二二・五糎、横一八・〇糎。卷第四にはなし。

柱刻 丁付、柱刻はなし。丁付は匡郭外右下（腹）にあり、卷第一は「一ノ一（一十）」までが陰刻、以降「一ノ十一（一廿九終）」の陽刻、卷第二は「二ノ一（一廿二終）、卷第三は「三ノ一（一廿六終）」（但し、「廿五」のみ陰刻）の陽刻、卷第四は他の卷々とはほぼ同位置に「四ノ一（一廿五終）」のように陽刻されている。

丁数 各卷により差異があり、

卷第一 三九丁（目録一丁、本文三八丁）

卷第二 三二丁

卷第三 二六丁（二丁オに部立、本文二五丁）

卷第四 三五丁（二丁オに目次、本文三四丁）

本文、卷第一、卷第三は十二行、卷第四は十行どり。但し、目録・部立・目次などは該当しない。

刊記 板元、跋文の奥（卷第四、三五丁ウ）に、

「延寶二年寅のはつきはしめつかたあるにしたかふ軒端にてはしり書侍る 吉野屋惣兵衛板行（口絵第五図参看）とある。

印記 各巻初葉右上に「林崎文庫」の方形朱陽印、右下に「林崎文庫」の子持梓長方形朱陽印を、巖裏見返しに「天

明四年甲辰八月吉且奉納 皇太神宮林崎文庫以期不朽 京都勤思堂村井古巖敬義拜」の献納本の長方形印を捺す。

(二) 内閣文庫蔵本

書型 大本、四巻四冊。体裁、縹色表紙無模様。縦二六・九糎、横一九・四糎。楮紙袋綴。

題簽 表紙左肩双边に「續松葉集第一^{名所}部（第二^{名所}部）」「續松葉集第三（第四）」とあり、卷第一のみが原題簽で卷第二からは後世の修補によるものである。

内題 尾題・匡郭・柱刻・丁付・丁数は各々神宮文庫蔵本に同様である。

刊記 板元、刊記は神宮文庫蔵本に同様、板元は「西洞院通二條上ル町 内海与兵衛板」（口絵第六図参看）とある。

印記 各巻初葉に上から「書籍館印」の方朱陽形印、「淺草文庫」「和學講談所」の子持梓長方形朱陽印、ほぼ中央部に「日本政府圖書」の方形朱陽印を捺す。

(三) 香川大学附属図書館蔵本(零本)

書型 大本、二卷二冊。体裁、紺色無地紙表紙。縦二七・〇糎、横一九・五糎。楮紙袋綴。

題簽 左肩に原題簽落剥の痕跡があり、その上に「續松葉集 第壹(式)」とうちつけ書きになっている。

内題 尾題・匡郭・柱刻・丁付・丁数は各々神宮文庫蔵本に同様である。

刊記 板元、巻第四が存せずなし。

印記 各巻表紙見返しに、上から「香川大学附属図書館」の方形朱陽印、「神原文庫」「香川大学附属図書館」の隋円

形印を捺す。巻第一の初葉表に「神原家圖書記」の長方形朱陽印、巻第一の二丁表右下に「佐州浦惣社守大官司」の方形朱陰印を捺す。なお、本書の調査に際しては、香川大学の佐藤恒雄氏の格別の御高配を忝うした。

(四) 前田育徳会尊経閣文庫蔵本(零本)

書型 大本、二卷二冊。体裁、薄縹色表紙無模様。縦二七・〇糎、横一九・三糎。楮紙袋綴。

題簽 左肩双辺に「續松葉集(第一^{名所})落剥(第二^{名所})」の印行題簽を貼る。

内題 尾題・匡郭・柱刻・丁付・丁数は各々神宮文庫蔵本に同様である。

刊記 板元、巻第四が存せずなし。

印記 各巻初葉右肩上に「和光同塵」「前田氏尊経閣圖書記」の方形朱陽印を並んで捺す。

以上四本のほかに『國書總目録』に依れば「温古堂丸山文庫本」が記載されている。これは、明治初期に長野県史誌編纂に従事した歴史家・読書家であった丸山清俊(一八二一―一八九七)が蒐集した図書の一つであったが、今日ではその所在は確認し得ず、不明となっている。

ここでこれら四本について検するに、神宮文庫本・内閣文庫本を完本と称すると、香川大学本・尊経閣文庫本は零

本と言うことになろう。また、内容的には神宮文庫本と香川大学本とが、内閣文庫本と尊経閣文庫本とが各々合致する。その根拠としては、巻第二の十二丁裏の「逢坂」の項において景物並びに語句等を掲げた五行分（▲山 關 清水の薄」霧 なげき 別路 春雨」紅葉 櫻 くつはむし」東路 霞 ましら 夕立」琴の音 望月の駒）（口絵第三・四図参照）の有無を挙げ得る。これは一には本来存したものを削除したものか、一には本来空隙になっていた箇所に埋木をしたものかの二通りを考え得るが、四本間における比較からはそのいずれであるのかは判然と判らない。また、相互間における相異はこの一箇所のみである。『續松葉集』は初版本のみで、求板再版本は存在しなかったようであり、同一板木を用いているようであるから、板元が替わる時点で生じた現象と見ておくのが穩当であろう。

ところで、延宝三年刊『書籍目録』・貞享二年板『広益書籍目録卷三』・元禄五年刊『書籍目録』・元禄十二年刊『新版増補書籍目録』の「歌書付狂哥」部には「六(冊)續松葉集」とあり、延宝三年刊『新增書籍目録』(天和三年増修本)・天和元年刊『書籍目録大全』の「ろ 假名」部には「四(冊)續松葉集」とある。また、元禄九年・宝永六年『書籍目録大全』には、「ろ かな」部、「ろ 佛書」部の二項に「はかまや 續松葉集 五匁五分」とあり、正徳五年『書籍目録大全』の「ろ かな」部にも「はかまや 續松葉集 五匁五分」とある。これらはいずれも延宝二年開板本をさすものであろうが、今は「六冊本」の伝存を知らない。香川大学本・尊経閣文庫本のように「名所部」のみの伝本が現存することを考えるならば、「四冊本」を以って完本と称することは必ずしも適當ではないのだろうか。『松葉集』の跋文には、「五年もの歳月を費して編纂を卒業すると、かなり忌憚の念を抱きながらも、各々の名所に宗恵自詠の和歌を一首ずつ添加することにした」と記している。これによれば、『續松葉集』の「名所部」の染筆は万治三年(一六六〇)をさほど降るものではなからうと思われるが、板行は延宝二年(一六七四)になったのであろう。いずれにせよ『續松葉集』の各巻の体裁は整然としたものであり、敢えて六分冊にしたとも思われぬ。因みに、尾崎雅嘉の『群書一覽』の当該項註でも、「六冊本」の存在に言及するところはない。今後も考究すべき点は存するけれども、今は「四

冊本」を完本と称することにし、かつ、考察を進めたことをお断わりしておきたい。

三

『續松葉集』に関する研究文献としては、夙には尾崎雅嘉の『群書一覽』^{註3}、佐村八郎の『訂國書解題』^{註4}、福井久蔵氏の『大日本歌書綜覧』^{註5}上巻に各々所収されている当該項や、近くは小高敏郎氏の御論考などが挙げられよう。これらを参考しながら、『續松葉集』の内容を記すことにする。書誌の項でも述べたように、巻第一・巻第二には『松葉集』に倣い、いろは別に名所を掲出し、その名所順に自詠の名所和歌を収載している。巻第三は四季・戀・雜・誹諧・旅・哀傷・釋教・神祇・賀の十二部に分類して詠歌を収載している家集、巻第四は七編の和文を収載する歌文集である。巻第三・巻第四には他人詠の和歌が含まれているが、全巻では総歌数二一五九首となる。それらを歌番号によって示せば次のようである。

巻第一	(名所和歌)	一々	八七二
巻第二	(名所和歌)	八七三	一五九四
巻第三	春部	一五九五	一七〇二
	夏部	一七〇三	一七八二
	秋部	一七八三	一八七〇
	冬部	一八七二	一九三二
	戀部	一九三三	一九七〇
	雜部	一九七一	二〇四三
	誹諧	二〇四四	二〇四八
			八七二首
			七二二首
			一〇八首
			八〇首
			八八首
			六二首
			三八首
			七三首
			五首

旅	二〇四九～二〇五七	九首
哀傷	二〇五八～二〇六七	一〇首
釋教	二〇六八～二〇七二	五首
神祇	二〇七三～二〇七五	三首
賀	二〇七六～二〇七八	三首
	二〇七九～二一五九	八一首
卷第四		計 二一五九

但し、この中には宗惠詠の重出歌一〇首、他人詠の和歌一六首を含んでいるので、実際には二二三三首が宗惠詠の和歌ということになる。因みに、他人詠の和歌を列挙すると、

以三法師	一首(二〇四〇)	慈鎮和尚	一首(二二四一)
宗貞	一首(二二三一)	源空上人	一首(二二四二)
友真	一首(二二三四)	蓮生法師	一首(二二四三)
空也上人	一首(二二三六)	湛空上人	一首(二二四四)
菩提寺	一首(二二三七)	親鸞上人	一首(二二四五)
僧都源信	一首(二二三八)	蓮如上人	一首(二二四六)
行基菩薩	一首(二二三九)	善知識	一首(二二四七)
永観律師	一首(二三四〇)	延陀丸	一首(二二五〇)
打它公軌			

のようであり、各々一首ずつで計一六首を数える。

さらに、巻第一・第二の「名所部」に関して述べるならば、『松葉集』と密接な関係を有することは論を俟たない。
 万治三年（一六六〇）版本の跋文に、

略——しかあるに、我國六十よくの名所の哥書あつむるつゝてに、一首つつ哥のやうにもあらぬ事ともを、かつつゝくりかき付る事侍りき、人来て名所の哥あつめらるゝは、我人のためさも侍らまし、みつから不堪の身として、おほくの哥よみつらねらるゝは、何の用そや、又耳馴ぬ名所よむ事、古来のいましめなり、かた／＼おそれ有へし——略——（読点筆者）

と記しており、『松葉集』に所収した名所和歌を踏まえた上で、宗恵自らの名所和歌を詠出していることを言うのであるから。『續松葉集』には総数一五九四箇所の名所が掲出されており、名所和歌は掲出名所につき、各々一首ずつで計一五九四首である。これは『松葉集』が全国を五畿七道（七道を国別に細分して、五畿内六十三箇国）に別け、総数二四四六箇所に及ぶ名所を掲出しているが、その約三分の二に相当する。但し、名所の選択の基準を何処においているかなどの点は判然とは判らない。更に検討を加えたい。読合すべき景物などは、名所及び詠歌とは區別して、諸書にはあまり見られない頭書の体裁を採っている。これらは、概ね、初めに『松葉集』に所載されている景物を、次に証歌の一部分や語句を記している。事実、『松葉集』に所載されているそれらに合致する。また、名所及び名所の掲出順序では二、三箇所の例外を有するものの『松葉集』に准拠していることも言うに及ばぬことであり、これらを比較することによって、副次的所産であることの証左を確認し得る。

四

『續松葉集』以外の文献に見られる宗恵の和歌・詠草類はさほど多くはない。今日までの資料の涉獵・検索を通して披見し得たものを掲げると次のようである。（ゴシックのアラビア数字は解説のために仮に施した。また、∧∨の漢数字

は『續松葉集』の歌番号を不す。

①『正木のかつら』△山本春正・清水宗川撰、延宝二年序▽

巻第七 恋歌上

(忍恋)

1 みたるとも人には見えし恋衣心のおくのしのふもちすり

内海宗恵 (長右衛門)

△二五三▽

『長嘯子全集』第四
巻所収(古典文庫刊)

②『貞徳二十五回忌追福千首和歌』△延宝六年板、内閣文庫蔵▽

追福千首和歌 乾

(春)

(糸遊)

2 しつはたにみたれもやらず春風の長閑けき空に遊ぶ糸ゆふ

内海宗恵

△二五七▽

『貞徳家集』下巻所
収(古典文庫刊)

(夏)

庭夏草

内海宗恵

3 庭の面はさもあらはあれ心にしなき物くさのしけらすもかな

△二六三▽

(秋)

(七夕)

内海宗恵

4 あまの川こよひうちはしわたつみとあれにし床の塵やはらはん

(稲妻)

宗 恵

5 わつかなるひかりのまにも草の葉の露をもとめて宿るいなつま

夕萩

宗 恵

△一五二▽

6 紫の色に咲ぬるはななれは露もくたくる萩のゆふかせ

待月

宗 恵

△一五三▽

7 秋のよの長してふ名はつくくくと月まつくれやはしめ成らん

暮秋

宗 恵

△一五九▽

8 風のまへに残る木葉もある物をおしむに秋のなとかとまらぬ

追福千首和歌 坤

(恋)

祈身恋

宗 恵

△一六〇▽

9 あはてのみ我恋しなはいかゝせん千世もと身をや先ののらまし

寄石恋

宗 恵

△一六四▽

10 年ふれば軒の雫に石たにもあとある物と人はしらすや

(雑)

(窓竹)

宗 恵

△一〇三▽

11 ふる雨に軒のくれ竹うちなひきはるれはくらき窓のうち哉

③ 『名所歌集 二編』 八堀尾光久編輯・西田惟恒校正、嘉永七年板▽

上巻

13を例外として原本では、歌題・詞書、和歌、作者名と一行書きになっている。ここでは組版の都合で二行書きにした。

○羽束山 摂津 能勢郡

山夏月

12 月かけのはつかの山のつかの間に明るもをしき短夜の空

○白雲谷 同(≡山城)同(≡愛宕)郡

玄琢法印の山莊白雲溪といふ所にて

13 ことしけき都をよそにしら雲の谷の心やしつかなるらん

○紅葉洞 大和 十市郡

洞月

14 静なるもみちのほらの秋の空たれわか宿の月と見るらん

中巻

○穂坂牧 甲斐 巨摩郡

恋の哥中に

15 草を浅みかくるとすれと我戀はほさかの駒の荒て見ゆらし

○唐琴泊 備前 児島郡

旅泊

16 からことのとまりとききはふるさとの友をしそ思ふ浪のしらへに

○虫明迫門 備前 邑久郡

虫明瀬戸にて

17 故郷をおもへは秋の野へならて音をのみらなくむしあげのせと

六字堂 宗 惠

△二三▽

宗 惠

△一五六▽

宗 惠

△一五九▽

宗 惠

△四七▽

宗 惠

△五九▽

○薩摩迫門 薩摩

海路

18 船人のいきもつきあへすさつま瀉せとの汐さるすきかてにして

○出雲川 出雲 出雲郡

哀傷

19 歸りこぬ水そかなしきいつも川いつも絶せぬ流れなれとも

○狐川 同(＝山城) 乙訓郡

川

20 世の中の人のはかるてふきつね川見なる袖も猶こころせよ

④ 「宗恵和歌詠草八月十五夜」△一軸、宮内庁書陵部蔵▽

八月十五夜

21 今夜うしと立まふ雲の雨そゝき

あまりさやけき月のひかりを

22 雪とみえし月の光にふりそふる

今夜の雨やみそれなるらん

23 今夜とて待つる山の眉ならて

雲にこもれる月そいふせき

24 世中の人の秋にはあはしとや

宗恵

△三五▽

宗恵

△六九▽

宗恵

△三五▽

宗恵

△口絵七函参看▽

今夜の月の雲にかくるゝ

25 名にしおへる面ふせにや成ぬへき

今夜の月の曇はてなは

⑤ 『和歌五十人一首』 八宮川松堅編、享保八年板▽

竹雪

宗恵

貞徳弟子
六丁堂

26 竹そよく音たにたえて木にもあらず草とも見えすうつむしら雪

△二九七▽

⑥ 『貞徳追善和哥』 八弘化三年写、市古貞次氏蔵▽

月前鹿

幡磨長右衛門秀重

『貞徳家集』上巻所
収 (古典文庫刊)

27 いとはれて妻よこふらん雲もなくなきたる月にを鹿鳴也

△二八三▽

惜歳暮

秀重

28 来る方も思へはよしや芳野川なかるゝとしのおしき心に

寄露恋

秀重

29 佗ぬれは煙絶にし塩釜のうらやまれぬる我思ひ哉

△二五四▽

① 『正木のかつら』 には「正木葛作者考」に「内海長右衛門宗恵 一首」とあるように一首のみ所収されている。

「巻第七 恋歌上」に「忍恋」の歌題で「法橋収玄」と並んで収められている。『續松葉集』では第三句が「いつとも」となっており、「巻三 戀部」に「忍戀」の歌題で所収されている。

② 『貞徳二十五回忌追福千首和歌』 (題簽は単に「追福千首和歌」となっている) の中には合計一〇首の和歌が所収され

ている。この中で3・5・8・9・10の六首は『續松葉集』の所収歌に同じである。2は歌題の「遊糸」が「糸遊」となっている。6・7は『續松葉集』巻三、秋部に、

萩露

夕萩

むらさきの色に咲ぬる花よりも露そくたくる風の萩原

なれば

萩のゆふかせ

八〇五

待月

秋の夜の長してふ名はつくくと月待よひや初なりけん

くれ

ら

八三三

と各々所収されている。6は三句以降に異同があり、歌題も異なっているので、単なる異同とするには少しく問題が残る。本来別箇の歌であったのかも知れないが、今は証左とすべき資料もないので臆測の域を出ない。7は下句に少異がある。また、『追福千首和歌』は、吉田幸一先生が「二十五回忌の追福千首は、延宝五年に盛大に催された。会する者、門弟の長老和田以悦をはじめとして北村季吟ら百二十五名の多数に達し、貞門一派の壯觀を見ることができた。」と述べられたように、延宝五年（一六七七）に開催された歌会である。今、『追福千首和歌』に所収されている宗恵詠の一〇首が、この歌会における詠出歌であるとするならば、次のような二つの問題が生ずる。一つには宗恵の没年である。かつて、小高氏は「寛文年間（一六六一〜七二）、六十余歳乃至は七十歳前後の世寿で没したことになる」と述べられた。しかし、少なくとも延宝五年（一六七七）まで存命であったことになる。二つには『續松葉集』の成立年時である。その跋文及び刊記によれば延宝二年（一六七四）八月初旬以降であるが、三年降った延宝五年の成立になるのである。ところが、『追福千首和歌』の出詠者を検すると、貞徳門下の深草元政（六一三〜一六六八）、加藤盤斎（一六一一〜一六七四）などの詠歌が所収されていることから、延宝五年以前に没した門人の詠歌をも所収していることが判

かる。したがって、宗恵の和歌一〇首もこの歌会において実際に出詠したものではなく、『續松葉集』中より選歌されて、『追福千首和歌』の然るべき箇所に挿入されたと考えらるべきであろう。よって、宗恵の没年並びに『續松葉集』の成立年時に関する問題は、延宝三年（一六七五）刊『書籍目録』に「六 續松葉集」と所見することを考えれば、やはり、延宝三年以前に板行されたと考え得るし、宗恵の没年に関する小高氏の推定から一步も出るものではない。但し、4に關しては『續松葉集』やその他の文献に所収を見ないので、今後の検討を俟つ。

③ 『名所歌集 二編』には合計九首の和歌が所収されている。『名所歌集 二編』（堀尾光久編輯、西田惟恒校正）は嘉永七年（一八五四）板行されたもので上・中・下三冊から成る。宗恵の和歌は上・中巻に所収されている。下巻の「名所歌集二編作者姓名録」「ソ」の項には「宗恵宗 六字堂」とあるが、重出作者「ソ」の項には見出し得ない。12～20はすべて『續松葉集』に所収されている。但し、12の「山夏月」、14の「洞月」、15の「恋の哥中に」、16の「旅泊」、17の「虫明瀬戸にて」、18の「海路」、20の「川」の各々の歌題及び詞書は『續松葉集』にはなく、編者の堀尾光久が編輯に際して施したものであろう。なお、13及び19の詞書・歌題は、本来『續松葉集』に存にしたものである。したがって、『名所歌集 二編』の編纂に際して選ばれた宗恵の和歌は『續松葉集』に依拠するものであると言えよう。因みに、同じく堀尾光久編輯になる『近世名所歌集』（初編、嘉永四年（一八五二）板行）には一首も所収を見ない。

④ 「宗恵和歌詠草八月十五夜」に關してはすでに小高氏が述べられたことである。^{註9} 21～25の宗恵の和歌五首と貞徳の詠草一首とが各々の筆蹟で書記されている。添付の極書には「松永貞徳愚詠中天の本行門人宗惠筆 神田喜兵衛註10」（口絵七図参照）とある。小高氏は宗恵の筆蹟に關して「文字は歌人流の字だが、癖も強くなく、なかなか整っていて、宗恵の人物を思わせる」と述べておられる。自筆の詠草は殆ど伝存を見ない今日、宗恵の筆蹟を知る唯一の資料であり、かつ両者の師弟関係を裏付ける直接的資料でもある。これらの詠草は『續松葉集』にはすべて所収されていない。また、貞徳の「中天の雨にこよひはおりはて、月のあたりは雲やなからん」の一首も『逍遊集』^{註12}や詠草類^{註11}などには所収されていない。いず

れにしても『續松葉集』『追遊集』などの編者の目に触れることがなかったであろう。

⑥『和歌五十人一首』に所収されている本歌の原本(写本及び版本)は未見であり、小高氏の紹介されたものに依つた。檢するに、「六丁堂」は原本の儘に翻字したのであるうし、漢字・かなの違いは存するが、『續松葉集』の「冬部」に所収されている一九一七番歌に該当する。

⑦『貞徳追善和哥』に關してはすでに市古貞次氏及び吉田幸一先生註14が述べられたように、寛永十七年(一六四〇)八月二十日、松永貞徳が中心となって、藤原定家四百年忌と細川幽齋三十三回忌とを光明院で開催した歌会の全貌を知ることができる貴重な資料であり、定家卿の「月の百首」、幽齋の「四季五十首」、及び貞徳独詠の「法楽和歌百首」の計二四九首の詠歌を記録したものである。27~29三首の作者は「幡磨長右衛門秀重」とあり、「久重」註16ではない。しかし、「幡磨」は、夙に小高氏が述べられたように、「町人考見録」に所載する「播磨屋長右衛門」の屋号をさすのであろう。27・29の二首は、『續松葉集』には各々「定家卿四百年忌に」の詞書があり、同歌題で所収されている。但し、27は「定家卿四百年忌」の「月の百首」に詠出したものであるが、29は28と共に「幽齋法印三十三回忌」の「四季五十首」に詠出したものである。したがって、『續松葉集』の詞書は誤りと言えよう。さらに、28は『續松葉集』には所収されていないが、「幽齋法印三十三回忌」の席上での詠歌であり、出詠者が「秀重」であることから同一人物による詠歌と考えられよう。「秀重」の名は、爾後数次に亙って開催された貞徳の追悼の歌会などにも絶えて見出し得ない。今、充分な考察をせずに「秀重」と「久重」とを同一人物視することは危険である。他資料の出現を俟ちたい。

以上、①~⑦の文献に所収されている和歌二九首に關する考察を述べてきた。それらを整理すると、

『續松葉集』所収歌 1・2・3・5・8・9・10・11・12・13・14・15・16・17・18・19・20・26・27・29

『續松葉集』所収類似歌 6・7

『續松葉集』非所収歌 4・21・22・23・24・25・28

のようになる。これらの中で、非所収歌七首を検討すると、4は『追福千首和歌』一〇首中の九首が所収歌ではあるが、歌会における実際の詠歌ではなく、編撰者の誤りも考えられるので、宗恵詠とは断言し得ない。21と25は、他に宗恵の自筆蹟を披見し得ない現在、筆蹟を鑑定する術を持たないが、神田喜兵衛の極書によれば宗恵詠と認められよう。28は「秀重」なる人物の解明が俟たれるが、27・29二首と同一人物の詠歌と考えられる。したがって、「秀重」が宗恵と別人物であるならば、27・28・29は他人詠となるが、三首の中二首が『續松葉集』に所収されているので、宗恵詠と断定することはできないまでも、宗恵詠と考えることは許されよう。これらはいずれも更に考察を加えなければならぬが、相互の補訂に資する資料として貴重であると言えよう。

五

以上、『續松葉集』の諸伝本、内容とその他の問題に関する私見を述べてみた。前述のように、かつて、小高氏は近世歌学史や近世和歌史においては全く名を知られていないとも言える宗恵に高い評価を与えられた。それは五歳をも費して『松葉集』を編纂し、『續松葉集』のような家集を遺した功績に対するものである。確かに『續松葉集』の存在は注目に価する。不詳とされてきた宗恵像の解明に資する数多の資料を提供しているには止まらず、家集・歌文集を通して、江戸初期の町人歌人（地下歌人）の生涯を具体的に知るための、恰好な資料をも提供している。しかしながら、今日、全巻の翻刻がなかったのを遺憾に思い、その全貌を公にした次第である。宗恵及び周辺の人々に関する一資料になればと考えたわけであり、他意はない。

今後、資料の渉猟を通しての疑問点の解明に努め、家集に関する考察などは別の機会に譲りたい。

註1 『近世初期文壇の研究』第四章第一節、二二九頁～二九三頁。
 註2 『群書一覽』（尾崎雅嘉編著）名所類卷之六（享和元年版本六冊）

續松葉集 四卷 同上（＝宗恵）

松葉集編輯のついでに名所ごとにみづからの歌一首づゝよみたるを續集とし頭書にそれらの名所の讀合の影物カゲモノをしるす
 已上第一卷より第三卷に至る 第四卷には自作の和文七篇を載

註3 註2に同じ。

註4 『町國書解題』（佐村八郎著）三四二～三四三頁

ぞくしようえふしふ

續松葉集 四卷 僧 宗恵

先著『松葉名所和歌集』十六卷に漏れたるを拾ひ、且、各名所毎に自詠一首づつを添へて編輯し、題書には名所讀合の景物を記せり。但し第四の一巻には自作の和文七編を収めたり。

註5 『大日本歌書綜覧』上卷（福井久蔵編著）三八九～三九〇頁。

續松葉集 大四卷 同（＝宗恵）

卷一二にはいろは順に名所と歌を擧げ、卷三には春夏秋冬、戀、雜、俳諧、旅、哀傷、釋教、神祇、賀の十二部に分ち自家の歌を載せ、卷四にてその文七編を載せ、頭書には讀合すべき景物歌詞を載す。延寶二年寅の葉月初めつ方あるにしたかふ軒端にてはしり書き侍りとあり。吉野屋惣兵衛板行す。

註6 註1に同じ、二八三頁～二八五頁。

註7 『貞徳家集』下卷（古典文庫刊）、三七九頁～三八〇頁。

註8 註1、註6に同じ、二七一頁。

註9 註1、註6、註8に同じ、二八五頁～二八六頁。

註10 「和漢書畫古筆鑑定家印譜」に徴すれば、古筆家神田喜兵衛に該当する。神田喜兵衛は「神田道智男正徳元年七月二九日没七十五 名定恒 道僖」と記載されている。

註11 註1、註6、註8、註に同じ、二八五頁。

註12 『貞徳家集』上・下卷（古典文庫刊）。

註13 註1、註6、註8、註9、註10に同じ、二九二頁。

註14 「国文白百合」5号 昭49・3。「貞徳の和歌に関する一資料（翻刻・解題）」、八二頁～九三頁。

註15 『貞徳家集』上巻（四二六頁～四六五頁）に「貞徳追善和哥」として翻刻を収載。なお、下巻（二三五頁～二三八頁）に解説がある。

註16 『誹家大系図』に「貞徳―宗恵 内海氏、通称長右衛門、名久重、六字堂ト号ス。―略ト」と収載されており、宗恵の名は「久重」である。称谓などに関しては小高氏の論考を参看されたい。

〔附記〕

草稿に際して、吉田幸一先生より種々の御教示を賜り、また、『近世初期文壇の研究』並びに『貞徳家集』上・下巻よりは恩恵を蒙ること甚大であった。記して深謝申し上げる次第である。